
あたしと弱味と仮彼女

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしと弱味と仮彼女

【Zコード】

Z9629Z

【作者名】

近衛龍一

【あらすじ】

一年生に進級した日の始業式。

文月学園Aクラス所属の木下優子は誰にも見られたくないものを学園一の完璧少年、水谷に見つけられてしまう。

どうしてもバラされたくない優子は、水谷の出した『俺の仮彼女になれ』という条件を受け入れる。

水谷の仮彼女として始まつた優子の新学年の生活は一体どうなつていくのか……？

「えぐつ……どうしてあんたは……あたしが泣いてるときたに……

…ひぐつ……いつも側にいるのよお……」

「セヒに泣いてる前がいるからだらうが」

バカテスにはあまり見ない純愛系（？）恋愛ストーリーっ…！

最悪な一日四回（前書き）

新連載ですっ！

更新ペースは不定期ですがよろしくお願いします！！

最悪な一日Ⅲ

「あれー？ ピンヒヤッちやったのかしい。」

それは一年生に進級した始業式の口のこと。

あたし、木下優子は放課後、探し物をしていた。

「多分あるとすればこの辺りのはずなんだけど……」

必死になつてとある探し物を探す。

普通であればまた明日にでも、となるのだが、今回ばかりは事情が違つ。

それは見つかれば今までに築き上げてきたものを一瞬にして崩すような代物。

命に代えても誰かに見つかるわけにはいかないのだ。
幸い、もうクラスの皆は帰つてるので大丈夫。
どれだけ時間かけても必ず見つけ出さなければ……

なんて考えながらふと時計を見ると時間は5時。
生徒が始業式に残つている時間ではない。

よし、ともう一度気合を入れ直して探し始めたその時だった。

ガラツ

教室の扉が開き、あたしは慌てて扉を振り向く。

「えっと……水谷君……だつかしり？ ピンヒヤったの……？」

そこに立っていたのは同じ△クラスの生徒。

クラスが変わったばかりなのでクラスメイトを全員覚えているわけではないのだが、彼のことは嫌でも頭に入っていた。

成績優秀、容姿端麗。

今はやつていみたいだけど、一年生の頃は野球部のエースで、運動神経も抜群という恵まれた超完璧な男子。HRの時、Aクラスの女子の大半はみんな水谷君に釘付けだった。だからこそ新しいクラスになつたにも関わらず覚えていたのであり、今彼がここにいることが不思議なのだ。

「それは俺の台詞だ木下。お前こそこんな時間に何をしているんだ？」

「あ、えっと……ちょっと探し物を……」「探し物か……」

顎に手を当て少し考え込む水谷君。

うん、この姿勢ならあれだけ離し立てられても仕方ないか。

なんてどうでもいい事を考へていると、水谷君はバックから一つの物を取り出して言った。

「もしかして、お前の探してゐる物つてこれが?」

さつと取り出したものは男と男が抱き合つてゐる絵が描かれている本。

あ、あれは……！」

「そ、それあた……！」

『それあたしのー』と途中まで言つたところハツとなる。

「ま、まよい！」

「まう？ そ、うか。やつぱりこれは木下の物だつたのか

パラパラと本を捲りながら確認を取つてくる水谷君。
さ、最悪だ……！

「まさか優等生の木下がこんなB級本を読んでるとは驚きだな」
「…………っ！ か、返してよ…………」
「ん、いいぞ」

サツと差し出された本を素早く受け取つて抱え込む。
れて、いじかげんじよつか……

「木下、このこと黙つて欲しいか？」

「え…………？ いいの…………？」

「ああ、別にいいぞ」

た、助かつた！

水谷君はいい人だ！

ホツと安心しているのも束の間、あたしさのことをいの野に知られたことを後悔する」とになってしまった。

「ただし、条件がある」
「じょ、条件…………？」
「俺の仮彼女になれ
「え…………？」

あたしの高校一年生の春は、最悪の一曰から始まった。

翌日——

昨日見たばかりなのにやつぱりその大きさに驚かされてしまう広い教室に足を踏み入れると、もう既に何人か生徒が登校していた。すぐに田に入つたのは他の男子を話しているムカつくあいつの姿。そしてあたしが来たのに気がついたのか二ちらに向いて、

「よ、木下。おはよ

と平然と挨拶をしてきた。

営業スマイルで「一七一七」としているが、田では『挨拶仕返せよ』と言つてゐるのが分かる。

「おはよう水谷君」

仕方ないので二ちらも営業スマイルで挨拶を返すと、これ以上話しかけられない内に自分の席に行き鞄から学習用具を取り出して広げた。

「全く……急に挨拶なんてしたら怪しいじゃな……」

そつ息息ながら浮かんできたのは、思い出すだけでもムカつく、あのやり取りだった。

「ちょっと……！ それどうこいつ意味よ！」

「そのままの意味だが？」

「なんであたしがあんたの仮彼女なんかに……っ……」

「それはお前の秘密を俺が握ってるからな」

「く……っ……」

確かに事実にぐうの音も出ないあたし。
待つて……水谷君があたしにそんなことを語りメロリットって……？

「なんで……なんでそんなこと条件とするのよ。水谷君ほどの姿ならあたしじゃなくとも沢山女の子が寄ってくるでしょう？」

「ん~、まあ確かに。だが俺はお前がいい」

「ど、どうしてよ……」

「お前は俺と同じ匂いがする」

「お、同じ匂い……？」

「どうこの意味だろ……」

「そ。お前も俺も、仮面を被つてゐる。それもめちゃくちゃ分厚い仮面をな」

「あ、あたしは別に……」

「B」本持つてたやつが言える言葉じゅねえだら

「う……っ」

「だからよ、少しやりこなは本性出したてこいつかなあなんて思つてる

から、その練習」

「同じ仮面を被つてゐるあたしを練習台にしてみたり」と……？」

「そういうこと。理解が早くて助かる」

「……………仮彼女つてどのへりになればいいのよ…………」

「まあ2～3ヶ月くらい?」

「……………本当に黙つて貰えるんでしょ?うね……」

「もちろん。約束は守るぜ」

「だったら……その条件受けれる……」

「よつしゅ。交渉成立な」

「で、でも眞には付き合つてしまつて言わないでよー。」

「まあ別にそれでもいいぞ」

「こんなやつと付き合つてるとか広められるなんてたまたもんじゃ
ない!」

絶対にばれなこよつこじつやるー

「さて、それじゃ帰るとするかな。木下、一緒に帰るか?」

「…………遠慮しておくれわ」

「だらうな」

当たり前でしょうが。

いきなり人の弱味を握つて仮彼女になれなんて言つやつなんかと誰
が一緒に帰るかつづのー

「まあどうでもいいけど木下。俺と一人きりのときだけは仮面被る
の、禁止な」

「…………なんですよ」

「なんでも、だ。どうせ今更隠したつてしようがないだらうが」

「…………そうね、分かったわ」

「それじゃあな木下

ああ～っ！

イライラしてきたつ！！

なんであたしがあいつの実験台にならなきゃいけないのよ…

ムカムカする気持ちのせいで勉強にも手がつかない。
そんなことを思つてみると、水谷君達の会話が聞こえてきた。

『おい陸、お前木下と仲いいのか？』

『何だよ急に』

『いや、今挨拶交わしただろうが』

『クラスメイトなんだから別に変じやないだろ』

『それはそうだが、あの木下に挨拶なんて出来ないぞ』

『あのつてなんだよ……』

『頭が良くて、運動神経もいい、リーダー性もあるし、何でも出来る、しかも綺麗。この学校の優等生と言えば木下優子とまで言われるほどだぜ？』

『へえ。そうだったのか。ま、どうでもいいけどな

へ、へえ……

あたしの印象つてそんなにいいんだ……

最後の『どうでもいい』発言はムカつくけど、ちょっと嬉しいかも

これも今まで優等生を演じてきたおかげね！

今は水谷君にその努力を盾に脅されてるけど……

その後はHRが始まり、高橋先生がFクラスとDクラスの試験戦争のせいで午前の授業が自習になるという事を伝えて、そのまま午前の時間は過ぎていった。

Fクラスが勝つたみたいだけど、秀吉のやつ、新学期早々何してるのがかしら……

蘇る記憶（後書き）

感想お待ちしておりますーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9629z/>

あたしと弱味と仮彼女

2011年12月31日21時45分発行